

# 「本来の意味・機能」と 二段活用の一段化

佐々木 淳志

## 1. はじめに

近世期に起きた大きな言語変化に「二段活用の一段化」という現象がある。これは、それまで上下一段活用、上下二段活用と四種の活用の種類を使い分けて表していた動詞の活用の種類が、上下一段活用の二種に統合されることを言う。

佐々木 (2010) では、動詞の自他対応に音 (形態) を利用する動詞群において、自他判別に一段化を利用した面がうかがえることを指摘した。例えば、自他同型動詞である「のぶる」は、自動詞では上二段活用、他動詞では下二段活用をとる。二段活用を維持した場合、自他動詞どちらも連体形では「のぶる」という形態をとるが、一段化により自動詞「のびる」他動詞「のべる」のように語の同定をより容易にする。そして、この種の表現で一段化が著しく進んでいたのである。このような動きは、「語の同定に一段化を利用した」と言い換えることもできる。

佐々木 (2013) においては、「語の安定化」と二段活用の一段化について検討した。そこでは、「語の安定化」を、語として活用によって変化しない部分 (語幹) を増やし、語の同定をより容易にする動きだと捉え、定説となっている単音節語における一段化の早さや活用の種類による一段化傾向の違いについて検討した。その結果、語の音節数が少ない語ほど「語の安定化」を指向する力が強く、語の音節数が増え「語の安定化」を図る必要性が低い場合ほど、他の事情の影響を受けやすいという実態が見られ、それが語によって一段化率が高かったり低かったりという状況を生み出していることを指摘した。一方で、複合動詞の後項として用いられやすい語や助動詞など、意味を添加したり、特定の用法で使用されたりする動詞群においては音節数に関係なく一段化が遅れるという実態が見られるように、「語の安定化」だけでは説明のできない用例が見られることも述べた。

この意味添加や特定の用法において二段活用が維持されるという実態は、「語の同定」と関連すると考えられ、語の「本来の意味・機能」を残しているか否かということが二段活用の一段化に関わっているのではないかと予想できる。つまり、機能の同定に一段化が関与したのではないかとということである。

これに関わって、動詞は活用することで様々な意味を表す機能を持つため、活用形の一段化への関与も予想される。活用形の違いにより一段化傾向に差異が見られることは多くの研究で指摘されている。坂梨 (1970) の近松世話物を資料と

(2)

した詳しい調査の中で、活用形に関して「終止連体形の一段化がすすみ、已然形は二段活用を維持している。」という指摘がされている。この傾向は小林（1980）山県（1982）によって版本狂言記や上方絵入狂言本でも同様に見られることが明らかにされている。しかし、これらの研究においては、実態の傾向を把握することに力点が置かれており、なぜそうなのかといった視点を伴う検討は必ずしも十分に行われてきていない。

そこで、本稿では改めて坂梨（1970）の指摘について、語の持つ「本来の意味・機能」の同定のために二段活用の一段化を利用していないかといった観点で、坂梨の用いた浄瑠璃以外の資料も調査対象としつつ、二段活用の一段化について考察し、「本来の意味・機能」と一段化の関係を見る。

調査は二段活用と、その一段化の混在の様相の観察に適している近世上方の口語的な資料として、浄瑠璃（近松・菅）と、浄瑠璃以外には遊女評判記、歌舞伎台帳、洒落本、噺本を対象として行った。具体的に調査に用いた資料は、引用の際の略称等とともに論文末に示している。

なお、一段化の様相の検討には資料、時代、用法、位相などの相違を総合的に踏まえる必要があるとされる（坂梨 1970）が、本稿はそれらの要素の関与については一まずおき、動詞の意味・機能と一段化の問題を中心に検討してみたい。従って、調査範囲の用例を、大きくは一括して扱うものとする。

## 2. 先行研究で指摘される観点の確認と再考

### 2.1 活用形と一段化

活用形に関して、未然形、連用形、命令形は一段／二段活用同形のため、二段活用の一段化で問題となるのは、終止、連体、已然の三活用形である。坂梨（1970）等によって、終止・連体形と已然形では一段化の傾向が異なることが指摘されている。終止・連体形は、連体形終止の一般化により終止形と連体形が同形化したという歴史上の変化が起きていることが注意される。すなわち、叙述を終止する、あるいは下接体言を修飾するといった特定の機能に対して特定の形式が対応するというような仕組みが崩れている語群である。そして、それらの語群では一段化が進んでいると指摘されている。そこで、ここでは活用形の一段化の様相を見る。

なお、坂梨（1970）では、連体形と終止形の同形化から、連体形と終止形を分けずに考察されているが、終止形と連体形は形態上同一に帰したものの、終止形は「文を終止する」、連体形は「体言に連なる」という機能面での違いがある。その違いが一段化に影響をもたらすかを確認するため、本稿では以下の四分類を立てる。

・旧終止形 …本来の終止形の形（二段活用の形）で使われているもの

①旦那の名代で銀をかる。(近松 9・大経師昔暦・507・10)

- ②爰に筆を投ぐべししかれども（洒落本 13・短華蘂葉・283・21）
- ・終止形 …連体形終止により生じた終止形であり、連体形と同形であるが言い切りで使われているなど、終止形として機能していると判断できるもの
  - ③そつじせまいと引わくる。（近松 12・女殺油地獄・192・3）
  - ④座敷をかへて吞すへると。（菅 1・北浜名物黒船噺・242・1）
  - ・連体形 …後接語などから連体形として機能していると判断できるもの
  - ⑤あれが俺が女房と見えるか。（歌舞伎・23・30）
  - ⑥三月なすびくれる客有（洒落本 13・短華蘂葉・284・4）
  - ・已然形
  - ⑦はうぼうにはりがみしてたづぬれどもしれぬゆへ（近松 4・曾ね崎心中・19・9）
  - ⑧名にこそたてれしたくさや。（近松 4・卯月紅葉・466・1）

また、二段活用維持、一段化の判別は以下のように行う。

- ・一段化 …本来は二段動詞だが一段化しているもの
- ⑨ねるよりはやくたかいびき（近松 4・曾ね崎心中・30・6）
- ⑩肌ふれるのは只一人（菅 1・染模様妹背門松・35・6）
- ・二段維持 …二段型活用を維持しているもの
- ⑪心みだるるばかりなり。（近松 4・堀川波鼓・535・2）
- ⑫たばこ入などになさるるは、（咄本 9・軽口片頬笑・329・6）
- ・不明 …送り仮名の不備などから二段型活用を維持しているかわからないもの
- ⑬爰が有に仍テ命は助る。（歌舞伎・心中鬼門角・22・6）
- ⑭目を光らして尋るげな。（菅 1・北浜名物黒船噺・248・3）

表 1 は上記分類に沿って活用形別に一段化の様相を示したものである。

（表 1 資料全体における活用形と一段化の関係）

活用形	一段化	二段維持	不明	総計	一段化	二段維持	不明	総計
旧終止形		17		17	0%	100%	0%	100%
終止形	204	251	157	612	33%	41%	26%	100%
連体形	404	470	209	1083	37%	43%	19%	100%
已然形	37	199	71	307	12%	65%	23%	100%
総計	645	937	437	2019	32%	46%	22%	100%

表 1 から、終止形、連体形の一段化率は高く、已然形の一段化率は低いことがわかる。終止形と連体形の間には大きな差は見られない。

(4)

次に、表1を資料別に細分化して示す(表2)。作品は初演・刊行等の成立年代順に並べてあるが、咄本は調査した資料の成立年代が他作品に比べ長いいため、その限りではない。

(表2 資料全体における活用形の一段化の様相)

資料	活用形	一段化	二段維持	不明	総計	一段化	二段維持	不明	総計
遊女評判記	終止	2	1		3	67%	33%	0%	100%
	連体	17	34		51	33%	67%	0%	100%
	已然	2	5		7	29%	71%	0%	100%
近松浄瑠璃	旧終止		13		13	0%	100%	0%	100%
	終止	101	210	107	418	24%	50%	26%	100%
	連体	203	341	113	657	31%	52%	17%	100%
	已然	18	152	47	217	8%	70%	22%	100%
歌舞伎台帳	終止	24	1	11	36	67%	3%	31%	100%
	連体	7		4	11	64%	0%	36%	100%
	已然	1			1	100%	0%	0%	100%
菅浄瑠璃	終止	36	19	26	81	44%	23%	32%	100%
	連体	111	50	86	247	45%	20%	35%	100%
	已然	8	31	21	60	13%	52%	35%	100%
洒落本	旧終止		2		2	0%	100%	0%	100%
	終止	13	5	8	26	50%	19%	31%	100%
	連体	13	6	1	20	65%	30%	5%	100%
咄本	旧終止		2		2	0%	100%	0%	100%
	終止	28	15	5	48	58%	31%	10%	100%
	連体	53	39	5	97	55%	40%	5%	100%
	已然	8	11	3	22	36%	50%	14%	100%
総計		645	937	437	2019	32%	46%	22%	100%

資料別に見ると、「終止・連体形の一段化が進み、已然形の変化が遅い」傾向は遊女評判記、近松浄瑠璃、菅浄瑠璃、咄本で見ることができる。洒落本では已然形の出現が見られない。歌舞伎台帳では已然形が1例のみであるため、一段化の割合が高くなっているが有効な傾向であるとは言いにくい。

以上から、活用形と一段化の関係の中で、従来指摘されてきた「終止・連体形の一段化が進み、已然形は遅れる」という傾向は、本稿でも同様に確認することができた。さらに、その傾向は資料ごとに見ても同様であることも確認できた。また、終止形と連体形の関係では、大きな意味を持つほどの差は見られなく、どちらも一段化の傾向にあると言える。

## 2・2 已然形と一段化

前節で資料、年代、文体に関わらず終止・連体形に比べ、已然形は二段活用を維持する傾向にあることを指摘した。ここでは、変化の遅い已然形の持つ機能に着目し、一段化の傾向を見る。

調査範囲に出現した已然形には、「係り結びを作る」「逆接（「ど・ども（とも）」を下接する）」「順接（「ば」を下接する）」という3つの用法が見られた。已然形の中で、一段化している物の例を以下に挙げる。

⑮またひとつらへてのせればぬけるおやこ（近松4・卯月紅葉・465・3）

⑯誉めれば浮きたちて（遊女評判記・114・6）

已然形の中で一段化しているものは、⑮⑯のような「ば」が下接し、条件句を作るものが大半を占めている。ここで、已然形を機能別に分け、一段化の様相を示したものが表3である。

（表3 調査範囲全体の二段活用動詞・已然形における、下接語と一段化の様相）

用法	下接形式	一段化	二段維持	不明	総計	一段化	二段維持	不明	総計
文末	係り結び	1		1	2	50%	0%	50%	100%
	引用		2		2	0%	100%	0%	100%
	小計	1	2	1	4	25%	50%	25%	100%
逆接	ど	1	15	1	17	6%	88%	6%	100%
	ども		6	1	7	0%	86%	14%	100%
	とも（ども）		1		1	0%	100%	0%	100%
	小計	1	22	2	25	4%	88%	8%	100%
順接	ば	35	175	68	278	13%	63%	24%	100%
	計	37	199	71	307	12%	65%	23%	100%

下接が文末というのは、「～こそ+已然形」の係り結びで使われており、已然形の後で意味的に文章の区切れが来るものである。「引用」は係り結びの後に助詞「と」が下接するものであり、「係り結び」に一括できる。調査範囲に4例見られ、以下に示す。

⑰舟こそ風にまかすれといへば、（咄本6・軽口御前男・242・9）

⑱夜こそふくれと（近松4・心中二枚絵草紙・201・4）

⑲名にこそたてれしたくさや。（近松4・卯月紅葉・466・1）

⑳月こそ出れあさ日山（近松5・淀鯉出世瀧徳・554・3）

「…こそ」の強調用法は現代まで残っているが、このような「…こそ～已然形」の係り結びは、室町時代末期には口頭語においてほぼ消滅したとされる（『日本語文法大辞典』「こそ」の項 野村剛史執筆）。⑰～⑳のような係り結びは調査範囲中にも4例とほとんど見られない。一方でこの時代には已然形が条件句を作る機能において盛んに使用されている事実もある。既に已然形の係り結びを構成するものとしての用法は国語史上の役割を終えつつあったと理解するべきであろう。係り結びで使われる⑰～⑳の中で一段化しているのは⑲の一例だけである。用例数が少なく、判断には慎重を要するが、このような場面には一段化が少ないという事実が確認される。

(6)

「ど・ども (とも)」が下接するものは逆接の条件句を作る。「とも」は「ども」の濁点が無表記であったものである。以下に逆接の例を示す。

⑲はうぼうにはりがみしてたづぬれどもしれぬゆへ (近松 4・曾ね崎心中・19・9)

⑳鐘木ばかりはないとよめれど、のぼることがならぬ (咄本 7・軽口独機嫌・247・9)

この逆接の条件句の一段化率は 4% (1/25) と順接と比べて大変低いことがわかる。逆接の已然形は既に確定した事態を受けるという意味で「已然」という活用形本来の用法で使われているものであるといえる。一段化が認められるのは㉒の 1 例のみである。この「読む」は佐々木 (2013) における分類では旧終止形で 2 音節の語となり、語の安定化の指向性の高い語と言える。安定化への指向性が高い語は一段化しやすい傾向が見られたため、そのような事情で一段化していたと考えられる。

一方の順接条件を構成するものは事情が少々異なる。順接条件では小林 (1996) によると、本来以下の三用法を表すため已然形が使われていた。

㉓「必然確定条件」：ゆづりうければわが為にもおやどうぞん。(近松 5・心中重井筒・131・1)

㉔「偶然確定条件」：あちらの方がおちればこちらも落る (近松 10・山崎与次平寿の門松・348・9)

㉕「恒常条件」：一寸延れ (のびれ)ばまた延る (菅 1・北浜名名物黒船噺・252・11)

阪倉 (1975・1993)、小林 (1996) によれば、これら三用法のうち、㉓の必然確定条件はこの時代已然形を使わず別語で表現するようになりつつあった。また、㉔の偶然確定条件も「タレバ」を用いることが多くなっており、これら二用法は衰退の様相を見せる。その代わりに已然形の形をもって、それまで未然形が担っていた「假定条件」の表現領域に進出し、用法を広げつつあったことが明らかにされている。これはすなわち、已然形の役割が純粋な確定条件ばかりでなく、假定条件としての用法 (新形式) へと変容しつつあったということである。以下に「已然形 + ば」が假定条件に関与するようになったことを示す例をあげる。

㉖あのおまほど見えれば薩摩へ戻らず京にゐる。(近松 6・薩摩歌・696・4)

㉖は已然形本来の用法でない仮定を表す用法で使用されている。このような新形式を含んだ順接の已然形の一段化率は 13% (35/278) である。この用法領域と対応する順接の已然形では、本来の用法を維持する逆接の已然形と比べ一段化が進んでいる事実が読み取れる。

ところで、このような新形式を含んだ順接の已然形の中でも一段化傾向の違いは見られるのだろうか。順接の已然形と佐々木 (2010) における自他対応の関係 (注 1) を表したものが表 4 である。

(表4 順接の已然形における、自他対応との関係)

自動詞/他動詞の対応	一段化	二段維持	不明	総計	一段化	二段維持	不明	総計
一段に持つ他動詞	1			1	100%	0%	0%	100%
四段に持つ自動詞	10	20	46	76	13%	26%	61%	100%
四段に持つ他動詞	7	102	17	126	6%	81%	13%	100%
持たない自動詞	2	15		17	12%	88%	0%	100%
持たない他動詞	10	26	5	41	24%	63%	12%	100%
二段に持つ自動詞	5	6		11	45%	55%	0%	100%
二段に持つ他動詞		6		6	0%	100%	0%	100%
総計	35	175	68	278	13%	63%	24%	100%

表4を見ると、自他対応を二段に持つ自動詞の一段化が進んでいるのに対し、四段に持つ他動詞は二段活用を維持していることがわかる。佐々木(2010)において、対応する自動詞/他動詞を二段動詞に持つ動詞群は、一段化による形態変化を自動詞/他動詞の弁別に利用したと考えられ、一段化が進んでいたことを指摘した。用例数が少なく、判断には慎重を期するが、二段活用を維持する傾向が強い已然形においても、この自他対応を二段に持つ自動詞から一段化が進行したと考えられる。一方で、対応する自動詞/他動詞を四段に持つ動詞群の已然形は、そもそも異形態であるため、一段化による形態変化を指向する必要性が薄い。そのため二段活用を維持したと考えられる。

### 2・3 助動詞と一段化

動詞と助動詞の一段化の遅速を比べた際、動詞の一段化が早く、助動詞の一段化が遅れていることは坂梨(1970)で調査されており、近藤(1977)や山県(1982)、小林(1980)によって、他の狂言資料や国字本「こんてむつすむん地」でも同様の結果が得られることがわかっている。佐々木(2013)においても、助動詞は動詞と比べ二段活用を維持する傾向にあることを指摘した。

そこで、ここでは二段型活用を持つ「(ら)る」「(さ)す」「しむ」の添加する意味と一段化への影響を検討する。

これらの助動詞の代表的な意味は「可能」「自発」「尊敬」「受身」「使役」である。そこで、これらの語の本文中での意味に着目し、分類したものが表5である。

(8)

(表5 調査範囲全体における助動詞の意味による一段化の様相)

助動詞意味	辞書形	一段化	二段維持	総計	一段化	二段維持	総計
受身	(ら)る	18	215	233	8%	92%	100%
可能	(ら)る	2	16	18	11%	89%	100%
自発	(ら)る		3	3	0%	100%	100%
使役	(さ)す	5	48	53	9%	91%	100%
	しむ	1		1	100%	0%	100%
使役 集計		6	48	54	11%	89%	100%
尊敬	(ら)る	2	248	250	1%	99%	100%
	(さ)す		2	2	0%	100%	100%
	しむ		1	1	0%	100%	100%
尊敬 集計		2	251	253	1%	99%	100%
総計		28	533	561	5%	95%	100%

表5を見ると、受身、可能、使役の意味で使用されている助動詞は概して10%前後の一段化率を示し、二段活用を維持していることがわかる。自発は0%だが、用例数が少ないため考察から外すこととする。尊敬の意味で使用されている助動詞の一段化率は1%であり、可能、使役の11%、受身の8%と比べ非常に一段化しにくいと言えるだろう。以下に例をあげる。

⑲取返してこいと云る故。(菅1・北浜名物黒船噺・230・12)

⑳召つかはる御主人へ(近松浄瑠璃・12・心中宵庚申・539・1)

⑲⑳の例では「る」の尊敬の意味が伝わらなければ敬語の体系、当時の規範意識から逸脱する。このように、助動詞としての本来の役割が正確に求められる場面において二段活用を維持する傾向にあることが読み取れる。

ところで、尊敬の意味で使用される助動詞253例のうち、一段化しているものは以下の2例である。

㉑国太夫ぶしをかたられるが(咄本8・軽口へそ順礼・101・11)

㉒サア是で田舎大臣にはなられるが。(菅1・北浜名物黒船噺・239・9)

佐々木(2013)で見た「語の安定化」の観点において、㉑は旧終止形4音節(かた<sub>ら</sub>る)、㉒は旧終止形3音節(な<sub>ら</sub>る)の語に分類される(注2)。そこで、尊敬の意味で使用される助動詞を音節数によって分類したものが表6である。

(表6 調査範囲全体における尊敬の助動詞の音節数と一段化の様相)

音節数	一段化	二段維持	総計	一段化	二段維持	総計
3	1	125	126	1%	99%	100%
4	1	98	99	1%	99%	100%
5		16	16		100%	100%
6		6	6		100%	100%
7		5	5		100%	100%
不明		1	1		100%	100%
総計	2	251	253	2%	98%	100%

表6における音節数不明というのは、「出」に接続し、振り仮名の不備により「でらる」「いでらる」の判別ができないものであり、調査範囲中に1例見られた。

尊敬の意味で使用される助動詞において一段化した2例は3、4音節語に一例ずつと、音節数の短い語と言える。そのため、「語の安定化」の力が働き、一段化を起こしたと考えることができる。

### 3. これまで十分に検討されていない観点から見た本来の意味・機能と一段化

#### 3.1 複合動詞と補助動詞

佐々木(2013)において、単音節語は「語の安定化」への指向が大変強いことを指摘した。しかし、調査範囲において一例のみ「得」が二段活用を維持していることも指摘した。以下に例を示す。

③1はんじやうのゑかうをうるも其身のくはほうと(近松4・卯月潤色・590・12)

「得」は「読み得る」「考え得る」のように現代語でも複合語として「可能」を表すことが多く、堅い文章や場面で用いられることが多い。実際の使用例には確認し得なかったが、同時期にも複合語としての二段語の用法が、一方では定着して並列していたために他の一音節語と異なって二段活用を残しやすかったということがあったかもしれない。そこで、ここでは単独使用される動詞と、複合形によって成る動詞の一段化傾向の違いに着目する。

調査範囲中の動詞の使用実態として、同じ動詞で「単独で使用されるもの」「複合動詞として使用されるもの」「補助動詞として使用されるもの」という三形態が見られた。

③2単独で使用：すだれをあぐれば(近松4・卯月潤色・574・7)

③3補助動詞：のんであげるが御馳走と。(近松4・堀川波鼓・505・10)

③4複合動詞：さやをもつて引あぐる(近松4・卯月紅葉・488・3)

補助動詞は調査資料の年代に多く使用されるようになった新形態である。補助動詞とは「その本来の意味をなくして独立した機能を失い、専ら他の語のあとに付いて使われる動詞(『日本語文法大辞典』「補助動詞」の項 山口明穂執筆)」である。以下に例を示す。

③5なんと聞てくれる気か。(菅1・紙子仕立両面鑑・185・11)

③6まま母にかけてくれるなど。(近松4・心中二枚絵草紙・195・6)

③5③6の例から、動詞「くる」のもつ本来の「物の授与」の意味合いが漂白化し、文法化した用法であることがうかがえる。

補助動詞と似た形式をもつ複合動詞は、「二つ以上の語としての意味を持つ部分(形態素)が結合して一語となったと認められる合成語のうちで、単独でも用いられる二つ以上の単語から構成されている単語」であり、前項と後項が対等・

修飾被修飾などさまざまな関係を構成するとされる（『日本語文法大辞典』「複合語」の項 秋本守英執筆）。つまり、補助動詞と違い、後項も本来の意味を持つということである。以下に例を示す。

③⑦口に手を当て引立つる。（菅 1・雙紋筐巢籠・84・5）

③⑧むながいつかんでねぢすゆるは。（近松 12・女殺油地獄・202・2）

③⑦③⑧の例では、後項「立つ」「据ゆ」が意味を失わず、意味を添えていることが伺える。つまり、補助動詞として使用される動詞は本来の意味・機能が薄くなっており、複合動詞は補助動詞と違い、後項も本来の意味を持つということである。これは前節で見た「終止連体形」と「已然形」の関係、已然形の「逆接」と「順接」の関係とよく似ている。そこで、これらにおいても、前節の結果同様に動詞「本来の意味・機能」が一段化に影響を及ぼしているのではないかと考えられる。そこで、ここでは上二段、下二段動詞のうち、複合動詞と補助動詞として使われているものの一段化の遅速について考察する。

### 3.2 複合動詞と補助動詞の別と一段化

ここでは、上記の見解に基づき、複合動詞と補助動詞の別と一段化の様相について検討する。

本稿における補助動詞、複合動詞の弁別については、形式での区別を基本とし、二つの動詞が連続しているもののうち、間に「て」をはさむものを補助動詞、間に何もはさまないものを複合動詞とし、表7にその一段化の様相を示す。

（表7 調査範囲全体の二段活用動詞における補助動詞と複合動詞の一段化の様相）

	一段化	二段維持	不明	総計	一段化	二段維持	不明	総計
複合動詞	77	233	180	490	16%	48%	37%	100%
補助動詞	24	4		28	86%	14%	0%	100%
総計	101	237	180	518	19%	46%	35%	100%

表7から、補助動詞形では86%（24/28）と大変高い一段化率を示すことがわかる。以下に例を示す。

③⑨不孝者にしてのけると。（近松 9・生玉心中・573・7）

④⑩ふみけしてくれると。（近松 12・女殺油地獄・138・1）

それに対し、複合動詞形では16%（77/490）が一段化し、48%（233/490）が二段活用を維持する。以下に例を示す。

④⑪引きとむれば九平次けうさめがほになつて。（近松 4・曾ね崎心中・17・12）

④⑫三百はもうけかねるに。（近松 5・淀鯉出世瀧徳・524・2）

補助動詞形で使われている動詞は二段活用を放棄し一段化がかなり進行していること、逆に複合動詞形で使われている動詞は二段活用を維持しようとしているこ

とが顕著に見られる。

補助動詞は本来の意味をなくして独立した機能を失い、他の語の後について使われる動詞であり、補助動詞として使われることで既にその語本来の意味は埋没してしまっている。つまり、ひとつの辞的なものへと変容してしまっているということである。そして、その機能の変化と一段化が連動するように起こっているということである。逆に複合動詞は補助動詞と違い、辞的な使用はされておらず、二つの動詞の本来持つ意味がどちらも生きている。そのような場合、二段活用が維持されており、一段化の動きが働きにくいという傾向が読み取れる。

ところで、補助動詞には二段活用を維持しているものが以下4例見られる。

④③ひらいて見すれば九平次よこ手をうち。(近松4・曾ね崎心中・19・5)

④④ま一どあはせて下さるる。(近松7・夕霧阿波鳴渡・541・6)

④⑤与兵衛が命をついで下さるる御恩徳。(近松12・女殺油地獄・185・10)

④⑥よろしう言ふてくるるもの(遊女評判記・難波鉦・33・10)

④③～④⑤は、尊敬の意味を表す動詞である。④⑥の例においても会話文中で尊敬の意を表す場面での使用である。前節において尊敬の意を表すために使用される助動詞では二段活用維持の傾向が見られることを指摘した。ここでも同様に、新形式であり、一段化しやすい傾向にある補助動詞の中でも、尊敬の意味を表す動詞は二段活用維持の傾向にあると言える。

#### 4 おわりに

本稿では、「本来の意味・機能」という観点から一段化の様相を検討した。その結果、坂梨(1970)で言われる「終止連体形で一段化が進み、已然形は二段活用を維持する」という傾向は、調査資料の範囲を広げても同様の結果が得られることがわかった。さらに加えて、以下の結果が得られた。

#### 先行研究で指摘される観点の確認と再考

##### 【活用形と一段化】

先行研究での指摘通り、終止形・連体形の一段化が進み、已然形は二段活用を維持する傾向が見られた。

二段活用を維持する傾向のある已然形の中でも、「本来の意味・機能」を濃く残す逆接用法では二段活用維持の傾向が認められ、新しい用法を獲得しつつある順接用法では一段化する傾向が認められる。さらに、新用法である順接用法の中でも、一段化による形態変化を自動詞/他動詞の弁別に利用したと考えられる語群から一段化が進行する傾向が見られた。

##### 【助動詞と一段化】

先行研究での指摘通り、助動詞は二段活用を維持しやすい傾向が見られた。

助動詞の中でも、「尊敬」の意味で使用されているものは他に比べ二段活用を維持しやすい傾向にある。しかし、尊敬の意味で使用される助動詞においても、音節数の短い語には「語の安定化」の力が働き、一段化を起こしたと考えられる例が見られる。

## これまで十分に検討されていない観点から見た本来の意味・機能と一段化

### 【複合動詞と補助動詞の別と一段化】

「本来の意味・機能」を濃く残す複合動詞形（動詞連用形＋動詞）は二段活用を維持する傾向にあるのに対し、「本来の意味・機能」を失い、辞的なものへ変化している補助動詞形（動詞＋て＋動詞）の一段化が進んでいる。しかし、補助動詞形の中でも、尊敬の意を添加するために使用されている語は二段活用を維持する傾向がみられる。

本稿で見た観点は、「本来の意味・機能の濃淡」というキーワードでまとめることができる。

已然形で二段活用を残す力と考えられるのは、已然形は他の活用形と違い、条件表現を表すという明確な機能を有していることが関わっていると考えられる。「条件句を作る」という已然形本来の意味・機能が残されているものとして「逆接・順接で使用される已然形」があげられる。逆接条件は古来のまま「確定した内容」を受ける、正に「已然形」であった。一方の順接条件は一部に仮定条件を派生させつつあり、その場合、確定した内容ではなく、「仮定した内容」を受ける、すなわち「仮定形」であって「已然形」ではない領域に対応しはじめていたということである。そして、そのような新形式を含む順接の已然形の方が逆接の已然形に比べ一段化しやすい傾向がみられる。つまり、已然形の中でも、本来の意味・機能でない新用法（仮定条件を表す用法）から変化していると言える。さらに、その中でも、形態での自動詞／他動詞の弁別を指向する語群において、一段化の動きがより強いものとなっている傾向が見られた。同様に、語本来の意味を残して使われている複合動詞形では二段活用を維持する傾向にあるのに対し、語本来の意味が漂白され、辞的に使用される新形式の補助動詞形では一段化がすすんでいる実態も見られた。

逆に、「意味を添加する」という本来の機能を残した助動詞においては、二段活用を維持する傾向が見られた。その中でも、「尊敬」の意味で使用される語は二段活用維持を強く指向する傾向も見られた。同様に、補助動詞形の中でも尊敬の意を添加する語では二段活用を維持する語も見られた。これは、「尊敬」を意識的に使用しているという点で本来の意味・機能が濃い用法だということができる。そこには、当時の人々が尊敬の意を表することを他の意味に比べより重要視

し、正確に伝えたいという意識が働いていた可能性も考えられる。しかし、そのような語の中にも、語の安定化を指向する短音節語においては一段化が進んでいる実態も見られた。

このようなことから、「本来の意味・機能」の濃い用法では二段活用を維持する傾向にあり、その中でも当時の人々の規範意識とも呼べる領域では二段活用を維持する傾向が顕著だと言えるだろう。しかし、語の安定化を指向する力がより強く働き、一段化が進んだと考えられる。これに対し、「本来の意味・機能」の淡い用法では二段活用を維持する力が弱まり、そこへ自動詞／他動詞の形態上の弁別を指向する力など、一段化を促進すると考えられる力が加わることで、一段化が進行していったと考えることができる。

ところで、なぜ「本来の意味・機能を残す部分では二段活用を維持し、本来の意味・機能を失い、辞的なものへ変容したものは一段化する」のかという問題が残る。そこには当時の人々の表現に対する規範意識とでも言うべき、より大切にしたい、より正しく伝えたいという意識の関与が考えられる。他の言語事実とあわせ、説明されるべきものとする。今後の課題としたい。

#### 注

- 1 佐々木(2010)において、動詞の自他対応と一段化の様相について検討する際、以下のような分類を立てた。
  - A 自他弁別に音(形態)の違いを利用する動詞群
    - 1) 活用の種類の違いによる自他対応
 

…終止形は同形だが、自他で活用の種類が異なる

たつ(立) 四自—たつ下二他／やく(焼) 四他—やく下二自 など
    - 2) 自他同形の対応
 

…自他を同形の語で示し、文脈以外での判断が不可能。

まく(負) 下二自—まく下二他／あく(明) 下二自—あく下二他 など
  - B 自他弁別に語尾「ル・ス」を利用する動詞群
    - 3) 語尾の違いによる自他対応
 

…自他で語尾が「る」「す」の対応を持つ

よる(寄) 四自—よす下二他／かくる(隠) 下二自—かくす四他 など
    - 4) 語幹増加と語尾付接による自他派生
 

…片方を原形とし、「る」「す」語尾を添加することで対応語を作る。

おつ(落) 上二自—おとす四他／まぐ(曲) 下二他—まがる四自 など
  - C 自他弁別を必要としない動詞群
    - 5) 自動詞⇔他動詞の対応を持たない物
 

…自動詞・他動詞の対応を持たない。

訴ふ下二他 / 押さゆ下二他 など

2 佐々木 (2013) では、語としての長さを一律に定める方法により、語別の傾向を探ろうと考え、基本的に一語をなしうる最小単位である (旧) 終止形での音節数を基準として考察を行った。

助動詞に二段型の活用を維持する傾向が見られることには、助動詞は上接する動詞部分が語彙的意味を担い、文法的意味を助動詞が活用語尾として担うという動詞一語に準ずるものとして位置づけることができるため、動詞と組み合わせられて長音節語を構成するという、助動詞としての性質の影響が考えられるという考察を得た。

そこで、本稿においても上接する動詞部分と助動詞を切り離さず一語として考え、旧終止形での考察を行う。

### 【調査資料】

〈近松門左衛門〉一引用では (近松 全集巻数・作品名・ページ・行) と表す。

曾根崎心中・薩摩歌・心中二枚絵草子・卯月紅葉・堀川波鼓・五十年忌歌念仏・卯月潤色・心中重井筒・丹波与作待夜の小室節・淀鯉出世瀧徳・心中刃は氷の朔日・心中万年草・冥途の飛脚・今宮の心中・夕霧阿波鳴渡・長町女腹切・大経師昔暦・生玉心中・鎧の権三重帷子・山崎与次兵衛寿門松・博多小女郎波枕・心中天の網島・女殺油地獄・心中宵庚申 (『近松全集』第4巻～第12巻 岩波書店 1986年～1990年)

〈酉水庵無底居士〉一引用では (遊女評判記・ページ・行) と表す。

色道諸分 難波鉦 - 遊女評判記 (『色道諸分 難波鉦』岩波書店 1991年)

〈中田楮同〉一引用では (台帳・ページ・行) と表す。

心中鬼門角 (『歌舞伎台帳集成』第1巻 勉誠社 1983年)

〈菅専助〉一引用では (菅 全集巻数・作品名・ページ・行) と表す。

紙子仕立両面鑑・北浜名物黒船噺・雙紋筐巢籠・染模様妹背門松 (『菅専助全集』第1巻 勉誠社 1990年)

〈洒落本〉一引用では (洒落本 全集巻数・作品名・ページ・行) と表す。

郭中奇譚・聖遊郭・短華薬葉 (『洒落本大成』第2巻 第4巻 第13巻 中央公論社 1978年～1981年)

〈咄本〉一引用では (咄本 全集巻数・作品名・ページ・行) と表す。

軽口露がはなし・露五郎兵衛新はなし・軽口御前男・軽口あられ酒・軽口星鉄砲・軽口はなしとり・軽口独機嫌・軽口へそ順礼・軽口浮瓢箆・軽口東方朔・軽口片頬笑 (『咄本大系』第6巻～第8巻 東京堂出版 1976年)

### 参考文献一覧

- 小林賢次（1980）「版本狂言記における二段活用の一段化について」『新潟大学教育学部高田分校研究起用』第 25 号
- 小林賢次（1996）『日本語条件表現史の研究』（ひつじ書房）
- 阪倉篤義（1975）『文章と表現』（角川書店）
- 阪倉篤義（1993）『日本語表現の流れ』（岩波書店）
- 坂梨隆三（1970）「近松世話物における二段活用と一段活用」『国語と国文学』第 47 号
- 佐々木淳志（2010）「自動詞・他動詞と二段活用の一段化」『愛知教育大学大学院国語研究』第 18 号
- 佐々木淳志（2013）「「語の安定化」と二段活用の一段化」『愛知教育大学大学院国語研究』第 21 号
- 山県浩（1982）「活用形の変化から見た上方絵入狂言本 - 二段活用の一段化の場合」『語文研究』第 52-53 号

（ささき・あつし、平成 21 年 3 月本学修士課程修了）